

Graduates under the COVID-19 Pandemic: A Report on the Graduates Survey in 2020

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-06-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神林, 博史 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24877

コロナ禍の中の卒業生：2020年度『卒業時意識調査』報告

Graduates under the COVID-19 Pandemic:

A Report on the Graduates Survey in 2020

神林博史（教養学部人間科学科）

1. はじめに

本学では、2009年度より「卒業時意識調査」を実施している。その目的は、「大学が『学位授与の方針』『教育課程編成・実施の方針』等として掲げている目標に沿った教育が実現しているか否かを点検し、今後のカリキュラム改善や教育内容・方法の見直しに資する情報を得ること」（加藤 2011: 43）にある。

2020年度卒業生意識調査は、コロナ禍というこれまでに経験のない状況下での実施となった。本稿では、コロナ禍の影響で例年通りの実施が困難となった卒業時意識調査をどのように実施したかを記録にとどめると共に、2020年度調査の結果に関する若干の分析・考察を行う。

2. 2020年度卒業時意識調査の実施方法

卒業時意識調査の有効回答率は、開始当初からしばらくの間は6割から7割にとどまっていた（加藤 2011、片瀬 2014、片瀬2015、片瀬2016）。しかし近年では、調査方法の工夫によって高い協力率を得られるようになった¹。

2019年度までの卒業時意識調査は以下のような2段階の方法で調査を実施してきた。まず第1段階として、2月下旬の卒業発表時に調査を行う。本学の場合、卒業発表に伴う学生への成績表および関係書類の配布はグループ単位で集行的に行われる²。この際に学生に対し自記式集合調査の形で卒業時意識調査を行う。かつては成績表配布と調査の順序が統一されておらず、このことが協力率低下の一因となっていた（成績表配布後に調査を行うと、回答せずに帰って

¹ 2018年度の有効回答率は80.1%、2019年度は94.4%であった。

² 本学では、学生指導を円滑に行うため「グループ制」を導入している。ここでのグループとは50名を単位とする学生の集合のことである。たとえば1学年200人の学科の場合、学生は4つのグループのいずれかに配属される。それぞれのグループに「グループ主任」と呼ばれる教員が配置され、新入生オリエンテーション時などの学生指導にあたる。年2回の成績表配布がオンライン化される以前は、学務係窓口の混雑を避けるため成績表配布はグループ単位で集行的に行われていた。卒業発表を集行的に行うのはこの慣習の名残である。

しまう学生が一定数発生するため)。近年は、成績表配布前に調査に回答してもらう方法に統一したことで、高い有効回答率を確保できるようになった。また、卒業時意識調査では学生番号の回答を必須としているので、未回答者を特定することができる。卒業発表時の調査に回答しなかった学生に対しては、各学科での学位記授与式の際に個別に調査票を配布し回答してもらうことで、有効回答率のさらなる改善をはかった。これらの調査はいずれも紙の調査票を配布する形で実施されてきた。

しかし、2020年度は新型コロナウイルス感染症の感染防止のため、従来のように卒業発表を対面で実施することができなくなった。これに伴い、2020年度調査は次のように実施した。第1段階として、卒業発表（2021年2月15日）の前後、2021年2月12日から3月15日に本学のオンライン学習支援システムである“manaba”のアンケート機能を利用して調査を実施した³。第2段階として、オンライン調査の未回答者に対し、学位記授与式（3月24日）に従来通り紙の調査票を配布し追加調査を実施した。

この結果、2020年度卒業生意識調査の有効回答率は85.2%となった。これは決して悪い数字ではないものの、2019年度の94.4%より約10ポイント下落した。このような結果になった原因は2つ考えられる。まず、第1段階のオンライン調査の有効回答率が26%と低調であった⁴。さらに、新型コロナウイルス感染症への警戒感からか、3月の学位記授与式の出席率が例年に比べて低かったことにより第2段階のフォローアップが例年ほどには行えなかった。新型コロナウイルスの感染状況によっては卒業証書配布も中止の可能性がありえたことを考えれば、調査方法にさらなる工夫が必要である。

3. 2020年度卒業時意識調査の結果の特徴

3.1 卒業時意識調査の質問構成とデータ処理

卒業時意識調査では以下の6つの質問を行っている。(1) 卒業生の基本属性（4項目）、(2) 本学の授業に関する評価（問1：12項目）、(3) 学習成果の自己評価（問2：10項目）、(4) 本学で学んだことの総合評価（問3：1項目）、(5) 各学科が独自に設定した質問（問4：質問内容・

³ 第1段階調査をオンラインで実施する場合、プラットフォームとしてはgoogle formsも有力だが、以下の理由によりmanabaを選択した。(1) google formsと比較して、調査対象者（卒業生）以外の者が回答するのを防ぐことが容易である。(2) manaba上での回答は自動的にID（学生番号）が記録されるため、学生番号の回答漏れが生じない。(3) 学科別の質問の設定が容易である。

⁴ 本学の新入生意識調査は2019年度からmanabaのアンケート機能を用いて実施している。こちらの有効回答率は2019年度、2020年度とも90%を超えた。このことから卒業時意識調査もそれなりの回答が得られるのではないかと期待したが、そうはならなかった。卒業時意識調査では回答のインセンティブが低くなるのはやむを得ないので、オンラインで調査を実施する場合はこの点を克服する必要がある。

項目数は学科により異なる)、(6) 自由記述 (問5)。本稿では、問1、問2、問3、問5を分析対象とする。質問の詳細は付録1を参照のこと。

本稿の関心は2020年度調査だが、比較対象として2018年度および2019年度調査データも分析する。一般に、時系列データの変化のトレンドを把握するためには、最低3時点を分析することが望ましいとされるためである。

本学のウェブサイト上で公開されている卒業時意識調査の概要では、回答結果は平均が0になるようリコードした上で集計されている。すなわち、選択肢が4件法の場合は「-2」「-1」「1」「2」、5件法の場合は「-2」「-1」「0」「1」「2」となる。いずれも、数値が大きいくほど肯定的な回答であることを示す。本稿ではこのような処理は行わず、4件法の場合は1から4、5件法の場合は1から5の数値を選択肢に与えて、その平均値を比較した⁵。選択肢は、肯定的な回答ほど数値が大きくなるようコードした⁶。

3.2 授業に関する評価

表1に本学の授業に関する評価(問1)の結果をまとめた。表の右端にある「平均値の差」は、2019年度を基準とし「当該年度-2019年度」で計算した結果である。この数値が負になる場合、当該年度の評価は2019年度より低いことを、数値が正になる場合は2019年度より高いことを示す。これら平均値の差については、その差が統計的に有意であるかどうかの確認を行った。具体的には、表1の各項目を従属変数、卒業生の基本属性⁷および調査年度ダミー(基準カテゴリは2019年度)を独立変数とした重回帰分析を行い、2018年度ダミーおよび2020年度ダミーの回帰係数が統計的に有意か否かで判断した。

⁵ 4件法の場合、上述のように「-2」「-1」「1」「2」とコードすると-1と1の差は2となる。回答結果を平均で比較する場合(言い換えると回答を量的変数とみなす場合)、このような処理だと恣意的に数値の差を大きくすることになってしまい、分析上好ましくないと考えられる。

⁶ 「そう思う～まったくそうは思わない」の場合は「そう思う」、「ほぼすべての科目(授業)にあてはまる～ほぼすべての科目(科目)にあてはまらない」の場合は「ほぼすべての科目(授業)にあてはまる」、「高すぎて、ついていけないものが多かった～低すぎて、がっかりするものが多かった」の場合は「高すぎて、ついていけないものが多かった」、「身についた～まったく身につかなかった」の場合は「身についた」、「できるようになった～まったくできるようにならなかった」の場合は「できるようになった」、「考えるようになった～まったくならなかった」の場合は「考えるようになった」が肯定的な回答となる。厳密に言えば、問1_10は「ちょうどよかった」が最も肯定的な回答になるが、授業レベルの高低に準じて「高い」方の数値を大きくするようリコードした。

⁷ 男子ダミー、学科ダミー(基準カテゴリは英文学科)、過年度卒業ダミーの3つ。

表1 本学の授業に関する評価：2018年度から2020年度

質問	年度	N	平均値 ¹⁾	標準偏差	最小値	最大値	平均値の差 ²⁾
Q1_01 一年次に大学で学ぶための基礎となる知識・技能を身につける授業を受け役に立った	2018	2058	3.34	0.64	1	4	0.00
	2019	2443	3.34	0.62	1	4	ref.
	2020	2122	3.34	0.62	1	4	0.00
Q1_02 授業科目の学年配当は、前に習ったことをふまえて次の授業科目へ進むようになっていた	2018	2055	3.28	0.63	1	4	-0.04 *
	2019	2444	3.32	0.60	1	4	ref.
	2020	2122	3.32	0.62	1	4	0.00
Q1_03 カリキュラムは、特定の領域だけでなく、幅広く学べるようになっていた	2018	2043	3.34	0.65	1	4	-0.03
	2019	2439	3.37	0.62	1	4	ref.
	2020	2121	3.35	0.64	1	4	-0.02
Q1_04 シラバスからは、各授業科目の目標、学習内容、成績評価方法などについての確かな情報を得ることができた	2018	2052	3.21	0.58	1	4	-0.05 *
	2019	2444	3.26	0.58	1	4	ref.
	2020	2122	3.26	0.59	1	4	0.00
Q1_05 それぞれの授業科目が何をめざしたものなのか、目標が明確だった	2018	2048	3.15	0.57	1	4	-0.04 *
	2019	2440	3.19	0.57	1	4	ref.
	2020	2119	3.16	0.59	1	4	-0.03 *
Q1_06 授業では、学生の学習意欲を高める工夫がなされていた	2018	2050	3.04	0.64	1	4	-0.05 **
	2019	2440	3.09	0.64	1	4	ref.
	2020	2123	3.04	0.67	1	4	-0.04 **
Q1_07 単位認定や成績評価は、明確な基準・方法にもとづいて適切に行われていた	2018	2050	3.32	0.57	1	4	-0.02
	2019	2436	3.35	0.56	1	4	ref.
	2020	2115	3.33	0.56	1	4	-0.02
Q1_08 毎年4月に履修する科目を考える際、教員や職員から必要な説明・指導があった	2018	2054	3.10	0.75	1	4	-0.06 **
	2019	2440	3.16	0.72	1	4	ref.
	2020	2122	3.10	0.78	1	4	-0.06 **
Q1_09 授業以外にも、教員は、質問・相談に答えるなど学習上の支援をしてくれた	2018	2053	3.21	0.66	1	4	-0.02
	2019	2437	3.23	0.65	1	4	ref.
	2020	2121	3.19	0.69	1	4	-0.04 *
Q1_10 あなたにとって、授業のレベルは全体的にみてどうでしたか	2018	2054	3.49	0.86	1	5	-0.04 *
	2019	2439	3.54	0.88	1	5	ref.
	2020	2123	3.36	0.81	1	5	-0.18 ***
Q1_11 「キリスト教学」の授業は、興味の持てる内容であった	2018	2056	2.88	0.86	1	4	-0.08 **
	2019	2446	2.97	0.83	1	4	ref.
	2020	2124	2.99	0.84	1	4	0.02
Q1_12 「キリスト教学」の授業や大学礼拝を通じて、人格教育を受けた	2018	2057	2.77	0.87	1	4	-0.09 **
	2019	2447	2.86	0.84	1	4	ref.
	2020	2124	2.88	0.84	1	4	0.02

1) 数値が大きいほど回答が肯定的であることを示す。

2) 数値は「当該調査年度平均-2019年度平均」。有意性検定は学生の個人属性および所属学科をコントロールした場合の結果(OLS)。*** p<.001, ** p<.01, * p<.05

平均値の差を見ると、2018年度・2020年度とも負の値になっている項目が多い。つまり両年の平均値は2019年度よりも小さく、2019年度をピークとする山型の変化が生じている。

2019年度から2020年度の変化に限定した場合、統計的に有意に変化したのは「それぞれの授業科目が何をめざしたものなのか、目標が明確だった」「授業では、学生の学習意欲を高める工夫がなされていた」「毎年4月に履修する科目を考える際、教員や職員から必要な説明・指導があった」「授業以外にも、教員は、質問・相談に答えるなど学習上の支援をしてくれた」「あなたにとって、授業のレベルは全体的にみてどうでしたか」の5項目で、いずれも2019年度から低下した（つまり、否定的な回答が増加した）。ただし、「あなたにとって、授業のレベ

ルは全体的にみてどうでしたか」の回答分布を確認すると、最も肯定的な選択肢である「ちょうどよかった」の回答比率は2019年度の45%から57%に増加した（選択肢の詳細は付録1参照）。今回の分析では「ちょうどよかった」は5点満点の3点として処理されるため、2020年度で平均値の低下が生じたことになる。したがって、この項目については結果を否定的に解釈する必要はない。

3.3 学習成果に関する評価

次に、表2に学習成果に関する評価（問2）と、本学で学んだことの総合評価（問3）の結果を示す。平均値の差の処理は表1の分析法と同じである。

表2 学習成果に関する評価および総合評価：2018年度から2020年度

質問	年度	N	平均値 ¹⁾	標準偏差	最小値	最大値	平均値の差 ²⁾
Q2_01 生涯にわたって学び続けるための基礎となる能力や技能を身につけることができた	2018	2018	3.24	0.60	1	4	-0.03
	2019	2419	3.27	0.58	1	4	ref.
	2020	2090	3.27	0.60	1	4	0.00
Q2_02 専攻した学問分野(学科)に関する基礎知識を身につけることができた	2018	2014	3.27	0.57	1	4	-0.02
	2019	2414	3.29	0.56	1	4	ref.
	2020	2086	3.32	0.60	1	4	0.03
Q2_03 専攻した学問分野(学科)における基本的なものの見方・考え方を身につけることができた	2018	2015	3.29	0.56	1	4	-0.03
	2019	2406	3.32	0.56	1	4	ref.
	2020	2085	3.34	0.59	1	4	0.02
Q2_04 ものごとを広く多様な視点から理解し、自分を相対化・客観化してとらえることができるようになった	2018	2007	3.29	0.58	1	4	0.01
	2019	2401	3.28	0.59	1	4	ref.
	2020	2085	3.30	0.60	1	4	0.02
Q2_05 自分で課題をみつけ、自分のもっている知識や技能を活用してそれを解決できるようになった	2018	2013	3.21	0.59	1	4	-0.02
	2019	2417	3.23	0.58	1	4	ref.
	2020	2086	3.22	0.62	1	4	-0.02
Q2_06 人生をよりよく生きようと考えようようになった	2018	2013	3.33	0.67	1	4	0.00
	2019	2414	3.34	0.65	1	4	ref.
	2020	2087	3.35	0.68	1	4	0.01
Q2_07 異なる意見や立場を踏まえて考えをまとめ、他人と協力してものごとを進められるようになった	2018	2010	3.34	0.59	1	4	0.00
	2019	2407	3.34	0.58	1	4	ref.
	2020	2088	3.34	0.60	1	4	0.00
Q2_08 自分の知識や考えを文章や図表などで論理的に表現することができるようになった	2018	2006	3.19	0.62	1	4	-0.03
	2019	2410	3.21	0.61	1	4	ref.
	2020	2088	3.21	0.63	1	4	0.00
Q2_09 外国語の力がつき、国際的な視野を身につけることができるようになった	2018	2011	2.74	0.86	1	4	-0.06 *
	2019	2412	2.80	0.86	1	4	ref.
	2020	2089	2.79	0.85	1	4	-0.02
Q2_10 自ら先頭に立って行動し、グループをまとめることができるようになった	2018	2012	2.95	0.74	1	4	-0.02
	2019	2417	2.96	0.75	1	4	ref.
	2020	2090	2.94	0.79	1	4	-0.03
Q3 あなたは、総合的にみて、東北学院大学で学んだことをどのように評価していますか	2018	2010	4.26	0.71	1	5	-0.01
	2019	2409	4.27	0.70	1	5	ref.
	2020	2085	4.19	0.80	1	5	-0.08 **

1) 数値が大きいほど回答が肯定的であることを示す。

2) 数値は「当該調査年度平均-2019年度平均」。有意性検定は学生の個人属性および所属学科をコントロールした場合の結果(OLS)。*** p<.001, ** p<.01, * p<.05

学習成果に関する評価については「外国語の力がつき、国際的な視野を身につけることができるようになった」の2018年度から2019年度の変化（2018年度から2019年度に上昇）が統計的に有意であるものの、その他は有意な変化はない。他方、本学で学んだことの総合評価については、2019年度から2020年度にかけて有意に低下した。

表1の授業評価および総合評価の平均値の背景には、2020年度に新型コロナウイルス問題への対応として授業がオンライン化されたことの影響を考慮することができる⁸。新型コロナウイルス問題が卒業時意識調査の回答に与えた影響をデータから直接確認することは難しいが、自由記述欄には新型コロナウイルス問題に言及したものがいくつかあり、本学への不満が散見された。そこで、自由記述の内容に注目してみよう。

3.4 自由記述欄にみる新型コロナウイルス問題の影響

卒業時意識調査の自由記述欄の回答は任意であり、回答率は例年それほど高くない。2020年度調査の場合、回答率は16.1%（N=342）であった⁹。

新型コロナウイルス問題に関するキーワードとしては、まず「コロナ」があげられる。さらに新型コロナウイルスの授業・教育への影響を示す語として「遠隔」「リモート」「オンライン」が考えられる。そこで、自由記述の中から上記4つの語を含む記述を検索した。「遠隔」を含む記述はゼロであったものの、それ以外の3つの語を含む記述は22ケース存在した。その抜粋を以下に示す（自由記述の詳細は付録2を参照）。なお、自由記述中の誤字は原文のままとした。

- リモートになることに異論は全くないが、そこに対する支援が少なかったように思う。リモートでもうまく活用すれば質のいい授業を受けることができると思うが、それがほとんどなかったのが残念です。リモート授業となり、どこに学費が使われているのかわからず、返還金もなかったことも残念でした。
- 授業のスタイルの突発的な変更（コロナ禍におけるオンライン授業など）への対応が他学部と比較して非常に鈍く、PCが使える教員を増員する必要性を感じた。
- コロナ禍ということもあったが、対応が薄すぎるのではないかと思う。他の大学では対応しているようなことすら対応していなかったりと、生徒のことよりも大学の利益のことばかり考えているような気がする。
- リモート化後の学費、コロナ禍での支援をしてほしかった。

⁸ 他にありうる原因としては調査法の変更および有効回答率の低下の影響が考えられるが、原因の特定は難しい。

⁹ 2018年度調査の回答率は19.2%（N=395）、2019年度調査は17.4%（N=425）。なお、自由記述の中には「特にありません」といった実質的な無回答が少なくないので、有効な回答（意味のある回答）の数はさらに減少する。

- コロナで教員が辛いのは分かりますが、我々のベネフィットは全くなくなりました。
- コロナ化ということもあり、いろいろ制限されたのもあるが、学費を少し下げるなどもう少し助けて貰いたかった。
- コロナでオンライン授業になってからは開講キャンパスが異なる際1コマ空けるというルールは必要ないと思うのですが変わらなかったあたりを柔軟に対応してほしいと思ったと思いました。
- 新型コロナにより学校施設が使用できなかったにも関わらず、学費減免をしなかったことには幻滅した。WEB環境を整えるために費用がかかったかもしれないが、施設が使用できなかった不利益が発生している以上減額すべきだったと思う。
- 今年はリモート授業になるなど、大学に赴くことがなくなった。そのため学費など安くしたり、一部返還などの措置をとってもらえるよう、改善してほしい。
- オンラインならば、授業料を下げて欲しかった
- オンラインになってから、課題管理が難しいように感じた。ネット上でも課題の状況を観れるようになればいいと思う。
- 今後、オンラインで履修する際は、いわゆる聴講もできるようにしてほしいです。履修確定した際に、聴講しようと思っていた科目がすべて消えたので…

新型コロナウイルス問題への本学の対応の不十分さに対する批判が多いことがわかる。ここで注意が必要なのは、批判の対象となっているのは授業の遠隔化そのものではなく、遠隔化に伴う本学の対応、特に学費面での対応だということである。また、遠隔授業の運営に関わる批判も散見され、こうした不満が授業評価（表1）および総合評価（表2）の有意な低下の背景となったのかもしれない。

4. 結論

2020年度「卒業時意識調査」の結果は、次のようにまとめられる。

- (1) 授業評価の一部項目が前年度から有意に低下した。
- (2) 本学で学んだことの総合評価が前年度から有意に低下した。
- (3) 自由記述欄には、本学の新型コロナウイルス問題への対応が散見された。

授業評価および総合評価の低下が新型コロナウイルス問題に起因するものか否かを厳密に検証することは難しいが、その可能性は否定できない。ひとつ言えることは、新型コロナウイルス

ス問題への対応は学生にとってきわめて切実な問題であり、本学の対応は他大学のそれと比較されやすい。したがって、他大学と遜色ないレベルの支援・対策を行うと同時に、そのことを学生に正しく認知してもらうことが必要である。この点で、本学の対応が適切なものであったか否かは、今後の検証が必要であろう。

参考文献

- 片瀬一男. 2014. 「大学生生活の評価－『2012年度卒業生意識調査』より－」『教育研究所報告集』14: 5-13.
- . 2015. 「大学生生活の評価（2）－『2013年度卒業生意識調査』より－」『教育研究所報告集』15: 31-48.
- . 2016. 「東北学院大学における教育の現状と課題－2009-2014年度卒業時意識調査の分析」『教育研究所報告集』16: 17-31.
- 加藤健二. 2011. 「2009年度『卒業時意識調査』報告」『教育研究所報告集』11: 43-59.

付録1 「卒業時意識調査」調査票（抜粋）

問1 東北学院大学で受けた授業を振り返ってみたとき、次の①～⑫についてどう思いますか。

- ①一年次に、大学で学ぶための基礎となる知識・技能を身につける授業を受け、役に立った。
[1 そう思う、2 どちらかといえばそう思う、3 どちらかといえばそうは思わない、
4 まったくそうは思わない]
- ②授業科目の学年配当は、前に習ったことをふまえて次の授業科目へ進むようになっていた。
[選択肢は①に同じ]
- ③カリキュラムは、特定の領域だけでなく、幅広く学べるようになっていた。[選択肢は①に
同じ]
- ④シラバスからは、各授業科目の目標、学習内容、成績評価方法などについての的確な情報を得
ることができた。[1 ほぼすべての科目にあてはまる、4 だいたいの科目にあてはまる、
3 だいたいの科目にあてはまらない、4 ほぼすべての科目にあてはまらない]
- ⑤それぞれの授業科目が何をめざしたものなのか、目標が明確だった。[選択肢は④に同じ]
- ⑥授業では、学生の学習意欲を高める工夫がなされていた。[1 ほぼすべての授業にあては
まる、2 だいたいの授業にあてはまる、3 だいたいの授業にあてはまらない、4 ほぼ
すべての授業にあてはまらない]
- ⑦単位認定や成績評価は、明確な基準・方法にもとづいて適切に行われていた。[選択肢は⑥
に同じ]
- ⑧毎年4月に履修する科目を考える際、教員や職員から必要な説明・指導があった。[選択肢
は①に同じ]
- ⑨授業以外でも、教員は、質問・相談に答えるなど学習上の支援をしてくれた。[選択肢は①
に同じ]
- ⑩あなたにとって、授業のレベルは全体的にみてどうでしたか。[1 高すぎて、ついていけ
ないものが多かった、2 やや高く、ついていくのにかなり努力が必要だった、3 ちょう
どよかった、4 やや低く、努力しなくてもついていけた、5 低すぎて、がっかりするも
のが多かった]
- ⑪「キリスト教学」の授業は、興味を持てる内容であった。[選択肢は①に同じ]
- ⑫「キリスト教学」の授業や大学礼拝を通じて、人格教育を受けた。[選択肢は①に同じ]

問2 本学での勉学をふりかえってみたとき、次の①～⑩についてどう思いますか。

- ①生涯にわたって学び続けるための基礎となる能力や技能（コミュニケーション能力、論理的思考力、情報リテラシーなど）を身につけることができた。[1 身についた、2 ある程度は身についた、3 あまり身につかなかった、4 まったく身につかなかった]
- ②専攻した学問分野(学科)に関する基礎知識を身につけることができた。[選択肢は①に同じ]
- ③専攻した学問分野（学科）における基本的なものの見方・考え方を身につけることができた。[選択肢は①に同じ]
- ④ものごとを広く多様な視点から理解し、自分を相対化・客観化してとらえることができるようになった。[1 できるようになった、2 ある程度はできるようになった、3 あまりできるようにならなかつた、4 まったくできるようにならなかつた]
- ⑤自分で課題をみつけ、自分のもっている知識や技能を活用してそれを解決できるようになった。[選択肢は④に同じ]
- ⑥人生をよりよく生きようとするようになった。[1 考えるようになった、2 ある程度は考えるようになった、3 あまりならなかつた、4 まったくならなかつた]
- ⑦異なる意見や立場を踏まえて考えをまとめ、他人と協力してものごとを進められるようになった。[選択肢は④に同じ]
- ⑧自分の知識や考えを文章や図表などで論理的に表現することができるようになった。[選択肢は④に同じ]
- ⑨外国語の力がつき、国際的な視野を身につけることができるようになった。[選択肢は④に同じ]
- ⑩自ら先頭に立って行動し、グループをまとめることができるようになった。[選択肢は①に同じ]

問3 あなたは、総合的にみて、東北学院大学で学んだことをどのように評価していますか。

- [1 ここで学んでとてもよかった、2 どちらかといえばよかった、3 どちらちもいけない、4 どちらかといえばよくなかつた、5 まったくよくなかつた]

問5 東北学院大学で学んだことの感想、大学や学部・学科に改善してほしいことなど、自由に書いてください。(自由記述)

付録2 2020年度「卒業時意識調査」自由記述

注：誤字・脱字は原文のままとした。

A. 「コロナ」を含む自由記述（全ケース）

1. 後半は新型コロナウイルスの影響で対面での授業ができなくなり、大変な日々もありましたが、ここで学んだことを今後の社会人生活にいかして頑張っていきたいと思います。
2. 今年度は、コロナという状況の中で、リモートでの授業が多かった。リモートになることに異論は全くないが、そこに対する支援が少なかったように思う。リモートでもうまく活用すれば質のいい授業を受けることができると思うが、それがほとんどなかったのが残念です。リモート授業となり、どこに学費が使われているのか分からず、返還金もなかったことも残念でした。【後略】
3. 卒業式したかったです！ぴえん！コロナうざい
4. 【前略】授業のスタイルの突発的な変更（コロナ禍におけるオンライン授業など）への対応が他学部と比較して非常に鈍く、PCが使える教員を増員する必要性を感じた。
5. コロナ禍ということもあったが、対応が薄すぎるのではないかと思う。他の大学では対応しているようなことすら対応していなかったりと、生徒のことよりも大学の利益のことばかり考えているような気がする。
6. リモート化後の学費、コロナ禍での支援をしてほしかった。
7. 履修科目を4月に決める際に、分かりにくくて本当に苦労した。もっとそこに予算を使ってex.「あと2個足りない」など、見やすいHP作りや、登録方法にしてほしい。コロナのこともあり、新入生がかわいそうです。
8. 【前略】コロナ禍での就活ではあったが無事にIT分野での企業から内定をもらい社会人として春から地元の〇〇【注：原文は具体的な地名が記されている】に帰って活躍する事が出来たためこの大学4年間は決して無駄では無く人生においての最後の学生生活をかけがえのない大切な時間になったと思います。【後略】
9. コロナ禍が明けた時は、以前のように一般でも学校中に入れる体制があると、卒業した後も足を運ぶ機会に●かるか●とと思いました。【注：●は判読不能】
10. 【前略】コロナで教員が辛いのは分かりますが、我々のベネフィットは全くなくなりました。【後略】
11. 大学生活では、とても楽しく学ぶことができたように思います。最後の一年間はコロナの影響で、これまでとは違った方法・形式になりましたが、それでも様々な講義を受講する

ことができました。東北学院大学で学ぶことができてよかったです。

12. 新歓活動の規制の緩和（コロナ終息後）
13. 【前略】 コロナ化ということもあり、いろいろ制限されたのもあるが、学費を少し下げるなどもう少し助けて貰いたかった。私個人の問題ではあったが、奨学金を払い、バイトして学費を払っていたので、新しいキャンパスが建つとはいえ、年々学費が上がるのは大変だった。でも、充実した大学生活は送ることができました。ありがとうございました。
14. コロナでオンライン授業になってからは開講キャンパスが異なる際1コマ空けるというルールは必要ないと思うのですが変わらなかったあたりを柔軟に対応してほしかったと思いました。
15. 【前略】 新型コロナにより学校施設が使用できなかったにも関わらず、学費減免をしなかったことには幻滅した。WEB環境を整えるために費用がかかったかもしれないが、施設が使用できなかった不利益が発生している以上減額すべきだったと思う。扶養者の所得に関わらず。

B. 「リモート」を含む自由記述（Aと重複しないもの：全ケース）

16. 私はあまり経験していないのですが、知人のリモート授業の受講が大変そうでしたので、どのように行われているかや、学生が納得しているかはチェックしてほしいです。
17. 今年はリモート授業になるなど、大学に赴くことがなくなった。そのため学費など安くしたり、一部返還などの措置をとってもらえるよう、改善してほしい。

C. 「オンライン」を含む自由記述（A Bと重複しないもの：全ケース）

18. オンラインならば、授業料を下げたかった
19. 楽しい四年間でした（最後の1年はオンラインであまりいい思い出はありませんが…）。個人的にゼミを3年間やり続けられたことがとても有意義で良い経験となりました。
20. オンラインになってから、課題管理が難しいように感じた。ネット上でも課題の状況を観られるようになればいいと思う。
21. 今後、オンラインで履修する際は、いわゆる聴講もできるようにしてほしいです。履修確定した際に、聴講しようと思っていた科目がすべて消えたので…
22. オンラインなのに学費が変わらない点